

市長が市民の皆さんと直接対話する「タウントーク」。各区独自のアイデアで、さまざまな形式により行われています。今回は、区内九つの町内会連合会の代表などが参加。地域の課題などを市長と話し合いました。その内容の一部をご紹介します。

(本誌全市版12・13頁にも関連記事を掲載しています)。



上田市長と司会の福津京子さん(FMアップルパーソナリティー)

まちづくりの主演は

まちの住民

初めに上田市長があいさつに立ち、市長が考えるまちづくりについて説明がありました。「自分たちのまちを愛し、まちにとって必要なものは何か、みんなで考え知恵を出し合い本当に必要なものを選び取る。誰かから与えられたものではなく、自分たちがこのまちをつくったという気持ちを持てるようなまちづくりをしていきたい」と、百六十人を超える会場の皆さんに語りかけました。

まちづくりの発信地

まちづくりセンター

さらに、活動の拠点として「既存の連絡所をまちづくりの中心となるような組織に改編していきたい」と、さっぽろ元氣ビジョンにおける「まちづくりセンター(仮称)」改編について触れ、「町内会との調整に加えて、住民間の横の連絡をネットワーク化していく役割を担うように考えていきたい」と訴えました。

豊平地区

若い世代とまちづくりを

●関正明さん(町内会連合会会長)

地区では、近代化する街並みと、地区の持つ歴史や風土を調和させながら、地域の活性化に向けた取り組みが必要になってきています。

●中川昭一さん(同副会長・フロンティア豊平21事務局長)

地区のまちづくり活動を推進する「フロンティア豊平21」の今後の課題は、若い世代もまちづくりに携わられるような活動を展開することです。地区内には、大学などがあり学生はたくさんいますが、継続したかわりができません。

市長より

学生をみんな仲間だと思って役割を担ってもらうことです。地区の良さは何かに参加してみないと分かりませんが、何かに残るものを一緒にできるような工夫すると、それが蓄積され伝統となって続いていくと思います。



美園地区

人に優しい地域施設を

●石井志津子さん(福祉のまち推進センター「黄色いりんご」副運営委員長)

平成八年に開設した「黄色いりんご」は、高齢者の見守りや安否の確認などを行い、福祉のまちづくりを進めています。また、地区内のさまざまな団体とのネットワークを広げ、ふれあい事業を実施しています。

しかし、地区内の施設はバリアフリー化が進んでいないため、事業を行うには不便利です。災害時の避難場所としても利用できる施設の必要性を強く感じています。

市長より

ネットワークの重要性を感じ、実践されていることをとてもうれしく思います。地域にネットワークを築く活動は、理想的な連絡所のあり方です。まちづくりの拠点として機能できるように考えていきたいと思っています。



月寒地区

連絡所の機能改善を

●小竹邦雄さん(町内会連合会副会長・月寒中央商店街振興組理事長)

地域活動の拠点となるべき連絡所。現在は、施設や職員体制も含め地域活動に十分に対応していません。

市長より

今までの連絡所は、市・区と住民との連絡調整をするという名前だけの機能でした。今後は、住民間の横の連絡をどうネットワーク化していくかということに機能すべきだと思います。そのためには、十分な施設設備や職員体制が必要ですが、なかなか一気にはいきません。しかし、それらを意識した活動が必要だと思い、連絡所長と協議を重ねています。



※このほか、三佐川令子さん(青少年育成委員会副会長)から、子供の安全対策のためのネットワークづくりについて要望がありました(全市版13頁参照)。

平岸地区

商店街の活性化に向けて

●篠原清さん(町内会連合会会長)

まちづくりセンター改編後の、職員体制の充実と施設整備を望みます。

また、昨年八月に、平岸中央商店街活性化のため空き店舗を活用して「ミニコミュニティスペースびらけし」を開設しました。助成期間を延長してください。

市長より

改編になれば、もっと人的な体制を整えていく必要があります。当面できることは、機能を充実させること、区役所から職員を派遣する制度を整えることなどを考えています。

「びらけし」に対する助成は、その期間でどこまで実現できるか実験し、自立できる方向を地域の皆さんの力で探っていただきたいということです。若者を呼び寄せて、一緒に活動を続けることによって解決していかれるのではないのでしょうか。

